



子どもの進路はどうして決める？

— カウンセリングで聞く、保護者の言い訳？ —

INFOE（海外子女教育情報センター） 代表

松本 輝彦

子どもと保護者、そして私の3者で、進路や学習上の問題での話し合いが増えてきました。保護者が子どもにアドバイスをしようとしているのですが、空回りするケースが殆んどです。そんな時に出る保護者の言い訳(?)から、子どもの教育で親の出来ることを、考えてみましょう。

「補習校やめていい?」から「どの大学?」まで、子供の教育の事柄について、保護者として決断・判断しなければならないことが多くあります。

その判断のお手伝いに、3者面談（カウンセリング）を設けることが多くあります。そんな時、言葉には出てきませんが、「どうして決めればいいのか?」と保護者が思い迷っている姿が明らかです。そして、決断するための基準（ルール）」として「子どもの希望」「子どもの将来」が、保護者の口からよく出てきます。しかし、それらのきれいな言葉に「意味が無い」あるいは「言い訳」にしかなっていないケースによく出会います。

今日は、その言葉で陥っている保護者の心の罫を明らかにして、お子さんの教育の決断で保護者としてできることを考えてみます。

子どもの希望?

「お子さんは、日米どちらの大学に進学希望ですか?」ある補習校での大学進学説明会に参加した保護者への私の質問です。日本とアメリカの大学が半々の回答でした。その保護者のお子さんの高校生たちに「日米どちらの大学に進学希望?」と聞いたところ、9割がアメリカ、1割が日本でした。

「子どもの希望」がはっきりしていれば、親としての決断は、賛成・反対どちらにしても、大変楽です。しかし、「子どもの希望」について、親と子のギャップが大きい場合は…。また、「何がやりたいか分からない」が殆どの子どもの現状です。

「子どもの希望」を理由に上げるケースで多いのは、保護者として「どうしていいか分からない」ので、子どもの側に責任を押し付ける態度です。これでは進路は決まりません。

ではどんな解決策があるのでしょうか?そのために、お子さんが「希望」を手に入れるプロセスを考えてみましょう。

ある日突然「・・・が僕の夢」といい始めて、その夢に向かって努力を始める。そんなケースはそれこそ親にとっての「夢」です。子どもが「夢や希望」について語りだす前には、

子ども自身の経験・きっかけ・情報収集が必要なステップです。それらを日常的に供給できるのは、お父さん・お母さんです。

「自分の若い頃は・・・」とは言わないでください。皆さんが育った環境とは全く異なったアメリカで、お子さんは成長しているのです。保護者からの、日常的に、継続したインプットがないと「夢も希望も」生まれないのです。

子どもの将来を考えて?

次に保護者が上げる理由が「子どもの将来を考えて」です。

「どんな将来ですか?」と聞くことにしています。将来像（目標と言ってもいいでしょうか）があつてこそ、その目標に向かってどんな進路を選べばいいのかが決まるのでは。

「子どもが25歳になった時、経済的に自立出来て、自分のやりたい仕事出来る」が目標だとしましょう。その中の「経済的に自立出来る職業」とはどんなものなのでしょうか?たとえば、お子さんが15歳だとすると、あと10年後に、確実に自立できる職業とはなんのでしょうか? この変化の大きい社会でそれを、自信を持って言える大人は居るのでしょうか?

10年ほど前に、日本では「社会福祉」が進路として期待され、多くの若者が関連の学部に進学しました。もちろん団塊の世代の退職後のニーズを睨んでの話でした。しかし、2・3年前から、この学部への志願が激減する現象が起きはじめました。その理由は、大学で社会福祉を修めた若者が就職したものの、労働環境・作業内容が3K（きつい・汚い・危険）に近いもので、さらに薄給が加わったものだったのです。その職場で2・3年頑張ってみたものの、決して大学卒業生（学士様）が就くような職業ではなかったのです。その現実が、マスコミ等で報道されると、関連する学部の志望者が激減したのです。たった10年の間の変化です。

皆さんは「コンピュータを勉強しておけば、10・20年後は大丈夫」と自信を持って、お子さんに進路として奨められますか?